

9 地域社会における芸術・デザインのありかたに関する実践的研究[2] (2013年度)

岩塚一恵

建築デザイン研究室

近年国内で散見される、地域性を特色とする大規模芸術祭は、地理的特徴や土着的な要素を全面に押出す“観光的”な面から、従来の美術館やギャラリーを訪れる所謂[美術関係者]以外の“新しい観客層”の獲得に成功してきた。地域社会との関わりや、気候、食、地域再生など、従来の国内における美術の提示方法と異なるこうした傾向は、新潟県の「大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレ」(2000年～)を筆頭に多数に及んでいる。そして昨今、これら芸術関連事業は都市部に進出し、更なる展開を見せている。研究では、従来の地方都市、山村部のみではない都市社会に於ける芸術の新しい提示方法や行政の取組み、システム、それらの果たす役割について調査・展示参加を通し、その意義を再考した。今年度は特に都市部に於ける活動を中心に、その特徴と地域住民の関係性に注目して調査及び参加を行った。

都市部で開催される芸術祭は、その多くが公共事業の一環という形式を有しており、1. 港湾都市特有の都市資源を活用するもの2. 都市の空洞化や機能再生に着目するもの、の2種に大別される。東京、横浜、名古屋、神戸など主要都市では大規模芸術祭が既に開催されており、その最も初期に定着した横浜トリエンナーレは、住民の関わり方に先進的な特徴を有している。都市部で開催されている4つの芸術祭を運営面等から比較したものを表1に示す。これまでの山村部や地域での芸術祭でも住民参加ボランティアは多々見られたが、越後妻有アートトリエンナーレのように都市部から学生等のボランティアを期間限定で派遣するケースが多くを占めていた。都市部で開催される芸術祭には市民サポーターの団体が企画段階から設立され、会期中のみではなく継続的に密着した関係性が構築されている。特に注目されるのは、市民の参加形式が芸術祭のサポート以外まで広がりを見せている点である。横浜トリエンナーレサポーターの「ハマトリツ!」の活動は、批評家や美術専門誌のエディター、作家に匹敵する活動となっており、“市民による芸術祭”と俗称されるほどの広がりを見せている。また、あいちトリエン

ナーレは市民に向けた芸術関連教育プログラムを充実させており、長期的目線で市民が主体的に関わっていく体制づくりを整えている。東京文化発信プロジェクトでは、Tokyo Art Research Labの活動が特徴のひとつであり、アートプロジェクトの実施者へ向けた人材育成プログラムを継続的に行うことで、新規プロジェクトを発生させる原動力と広いネットワークの場が形成されている。

近年の都市社会に於ける芸術事業の拡大は、公共事業としての有用性を担うと共に、当初は観光の一端、あるいは受動的な地域振興としての役割を担ったものが多数であった。しかし現在ではその内容も、社会との関係性も変化してきた。住民は、自身が関わり継続して行くための様々な試みを行い始めている。一例として、「墨東まち見世」(~2012年東京文化発信プロジェクト(図1))では、下町の町工場へ若手作家が弟子入りし、技術を生かし開催されるプロジェクトが話題を呼んでいる。こうした取組みは今後も地域の特徴を活かしながら発展して行くと考えられる。

開催年	開催頻度	主催	会場	所長参加	特長事項
横浜トリエンナーレ	2001～ 3年毎	横浜市、(公財)横浜市長官文化振興財団、NHK、朝日新聞社、横浜トリエンナーレ組織委員会	横浜美術館、新横浜(新港ふ頭展示施設)	横浜トリエンナーレサポーター「Hama-Treats!」(ハマトリツ!)	目コハマトリエンナーレサポーター「ヨコハマトリエンナーレ」
神戸ビエンナーレ	2007年～ 2年毎	神戸ビエンナーレ組織委員会・神戸市	ポアアイしおさい公園、元町高層下、神戸港など	神戸ARTサポーターズ	神戸アートワポーターズ公式ブログ
あいちトリエンナーレ	2010年～ 3年毎	あいちトリエンナーレ実行委員会、愛知県芸術文化センター、名古屋芸術振興局	愛知県芸術文化センター、名古屋芸術振興局、伏見地下園など	トリエンナーレスクール系	モバイル・トリエンナーレ(移動型展示)キッズトリエンナーレ
東京文化発信プロジェクト	2008年～ 毎年	東京都、東京都歴史文化財団	区内各所	区民美術館	Tokyo Art Research Lab (TARL)

表1: 都市部の芸術祭概要比較

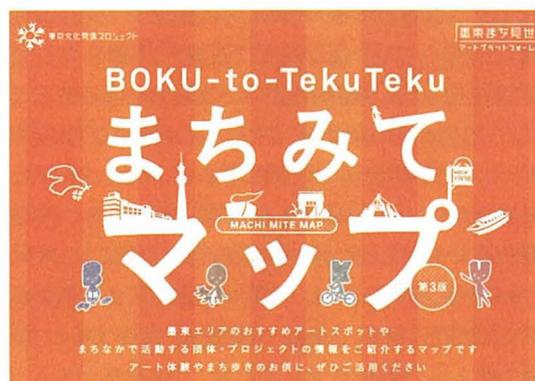


図1: 墨東エリアのアート・ネットワークの活動を綴った「まちみてマップ」表紙より